

映画『Love Letter』研究

— 隠された三つの物語 —

柳澤浩哉

A Study on “Love Letter”: Three Stories Hidden Under a Romantic Tale

Hiroya YANAGISAWA

キーワード：『Love Letter』, 岩井俊二, フィルム・スタディーズ

1. 研究の目的

岩井俊二監督の長編映画第一作である『Love Letter』（1995年公開）は、日本アカデミー賞優秀作品賞、『キネマ旬報』ベストテン第三位（読者選出ベストテン第一位）をはじめ数々の賞を受賞している。さらに、本映画は日本以上に東アジア諸国における人気が高く、とりわけ韓国では2000年のロードショー終了までに150万人の観客を動員し、日本映画としては空前の大ヒットを記録した。韓国の大学の売店では、本映画の印象的なせりふ「お元気ですか」を日本語で書いたマグカップが現在も売られているという。日本語教育の視点からも見逃すことのできない映画である。

本映画は、表面的には感性的・感傷的といった印象を残す恋愛映画であるが、表面的な印象と物語の実態との間には少なからぬ隔りがある。本論文では、雪と火が象徴するものを確認した後、三つの物語が書き込まれた重層的な構成を持つ作品であることを明らかにする。

三つの物語とは、死者のメッセージが三年後に届けられるロマンティックな表の物語、死者が恋人を天国に呼び寄せようとする裏の物語、さらに全ての登場人物が救われる救済の物語である。

* 本映画には藤井樹という同性同名の人物が登場し、一人は男一人は女である。二人を区別するため、本稿では男の樹を「樹」、女の樹を「イツキ」と表記して区別する。

2. 粗筋

映画はヒロインの一人である渡辺博子が、婚約者だった藤井樹の三回忌に出席する場面から始まる。三回忌を終えた彼女は樹の実家に寄り、中学時代の卒業アルバムを見せてもらう。博子はアルバムにあ

る樹の住所をメモすると、その住所に届くはずのない手紙を出す（樹の一家は神戸に引っ越している）。だがその後、樹からの返事が届く。

一方、樹の友人秋葉は博子に強い想いを寄せるが、博子は樹を忘れることができず、秋葉に心を開こうとしない。秋葉は、彼女の思いを断ち切らせるために、手紙の送り主を訪ねて博子と小樽に行く。二人は送り主に会えなかったが、亡くなった樹と同姓同名の女性（イツキ）が送り主であったと分かる（イツキはこの映画のもう一人のヒロインである）。博子はイツキに手紙を出し、死んだ樹について知っていることを教えて欲しいと頼む。イツキは彼の記憶を思い起こし、二人の母校を訪ねて写真に収める。その中で、樹が二年前に亡くなったこと、さらに彼にとって自分が特別な存在であった可能性に気付く。

その後、秋葉は博子を強引に樹の遭難した山に連れて行く。翌朝、博子は大声で山に向かって「お元気ですか。私は元気です。」と一人で叫び続ける。それは博子が樹と別れる儀式に他ならない。

その頃、イツキは風邪をこじらせて真夜中に倒れる。救急車すら動けない吹雪の中、イツキは祖父に担がれて病院に運ばれ一命を取り止める。ベッドで目覚めた樹は、不思議なことに、博子と同じ「お元気ですか。私は元気です。」を口にする。元気になったイツキの元に、後輩の女生生たちが一冊の図書館の本を届けにやってくる。その本には藤井樹と書かれた図書カードが挟まれており、その裏にはイツキの見事な似顔絵が描かれていた。

樹は中学三年の正月明けに突然転校してしまう。転校する直前、樹はイツキの家を訪ねて図書館の本を託し、ぶっきらぼうな口調で、自分はもう本を返せないから、代わりに返して欲しいと頼む（転校することには触れない）。その本には似顔絵のカードが挟まれていたのだが、イツキは絵に気付かないま

ま本を棚に戻していた。

届くはずのない死者の告白が、三回忌の年、いくつもの偶然が重なることで届けられたことになる。映画はイツキがこの本を抱きしめたところで終わるが、似顔絵のメッセージの意味について明示的な説明はなされない。

3. 炎と雪が象徴するもの

3.1. 死の象徴としての雪と氷

樹は雪山で遭難しており、彼の三回忌は大雪の中で営まれる。そして、秋葉と博子が訪れた遭難現場「お山」も雪に覆われていた。

また、イツキの父の葬儀は雪の中で行われ、葬儀から戻る中学生の彼女は、凍った坂道を滑走するように下り、凍ったトンボを目に留めると「パパ、死んだんだね」とつぶやく。さらに、風邪をこじらせたイツキが倒れたのは吹雪の夜であり、生死の境をさまよう彼女は吹雪の中を病院に運ばれる。これらの場面から、雪と氷が死を象徴していることが分かる。

さらに、白い色も死の象徴であり、三回忌の後、博子が立ち寄った樹の実家は、色彩が抑えられて白い光が室内を照らしている。その家に飾られた赤い雛壇（雛人形）が未完成で終わっていることには、生きるエネルギーの弱まりが象徴的に表現されている。赤が白に圧倒されているのだ。白い光に覆われた室内は、その家に暮らす樹の母の気持ちまでを暗示する。息子を失った母の心は凍りついているに違いない。博子と母の気が合うのは、樹を失った二人の心がともに凍りついた状態にあるからかもしれない。

3.2. 博子の「死」

雪山であおむけに横たわる博子が、はっと目を覚ますシーンから映画は始まる。目覚めた彼女は体についた雪をあわてて払いのけると、足早に山を降りて三回忌の会場に向かう。樹が雪山で亡くなっていること、目覚めた直後、彼女が何度か天を仰ぐことなどから、雪山に横たわった彼女は死んだ樹と話をしていたと考えられる。

雪山での眠りが凍死に繋がることは広く知られている。もしも目覚めなければ彼女はそのまま凍死していたかもしれない。樹と話す中で眠りかけたとすれば、彼女を眠りに誘ったのは亡くなった樹であり、

彼女を眠らせて天国に引き込もうとしていたと考えることが可能である。目覚めた彼女があわてたように雪を払い落とし、足早にその場を離れるのは、自分が死にかけていたことに気付いたからかもしれない。ただし、博子はこの後もずっと樹を忘れることができず、彼女を慕い続ける秋葉にも心を開かない。

なお、本論文では、死んだ後も樹が意志を持ち続け、イツキや博子に影響力を持つという前提で論を進める。フィクションの世界では珍しい前提ではないが、本映画の解釈にこの前提を持ちこむことには違和感があるかもしれない。筆者は本映画の読み解きには、この前提の導入が有効だと考えているが、「死者の意志」という前提を排除した場合の推論の可能性についても最後の7章で検討してみたい。

3.3. 火を扱う男たち、イツキを守る火

博子に想いを寄せる秋葉はガラス職人であり、作業場のオレンジ色の炎がたびたび映される。彼は博子の氷を溶かす火の役割だからである。さらに、何度か登場する彼の仕事場が雑然としているのは、彼の荒削りで少々ずうずうしい性格を端的に表現している。博子を樹から引き離すには、一途なずうずうしさが必要なのだ。彼が強引に彼女を手紙の送り主の家まで連れて行かなければ、藤井樹が二人いたことは永遠に分からなかっただろう。なお、この秘密を二人に教えたのは小樽に住む秋葉の友人であるが、この友人も炎を使うガラス職人である。

さらに、樹が遭難した山のおもとの山小屋には、赤いちゃんちゃんこを着た火事おやじと呼ばれる管理人がいる。博子と秋葉がこの山を訪れた晩、彼ら三人は火の前で暖かい鍋を囲みながら一夜を過ごす。博子が決別の儀式をするのは翌朝の早朝である。火とかがわる男たちが博子の心を溶かしたのである。

一方、小樽に住むイツキの家は暖房のオレンジ色の火で守られている。イツキはその家から離れることで徐々に風邪を悪化させていく。彼女の勤務する図書館に火は見えない。さらに、雪の残る病院に行き、雪の舞う母校の中学校を訪れたことで風邪が悪化し、中学校を訪れた日の夜、彼女は高熱を出して倒れる。

4. 樹の性格、彼と博子の関係

本稿において、亡くなった後も樹が意志を持ち続

け、彼が二人のヒロインに影響を及ぼしたと考えるのは、生前の彼が激しい性格の持ち主だったからである。彼は我が強く自分の気持ちを抑えられない性格であり、さらにイツキに強く惹かれていた。ここでは、生前の樹の性格を確認してみたい。

中学時代の樹は、無口、無愛想で我が強く、何を考えているのか分からないところがあった。彼は陸上部の短距離選手だったが、中3の夏にトラックにはねられて足を骨折し、最後の大会に出られなくなってしまった。だが、彼は出場予定だったレースが始まると、選手たちと一緒にスタートして競技をめちゃくちゃにしてしまう。この行動からは、競争したい、自分が速いという気持ちが抑えられず、さらに、自分の行動がどんな結果を生むかを考えない性格であることが分かる。イツキの記憶している彼はそれ以外の場面でも、一貫して自己中心であり、唐突な行動を取る人物である。彼は少なからず厄介な性格と言える。

一方、イツキと共に図書委員になった樹は、誰も借りていない本を借りて、図書カードに自分の中を残していくことに熱中していた。実は、その名が自分の名ではなく、彼女の名だったことが最後に明かされるのだが、その行動からは、イツキに強い想いを抱いていること、さらに、そのゲームを一人で続ける意志を持っていることが分かる。卒業後、二人の樹に接点はなくなる。その後、彼の前にイツキと瓜二つの博子が現れ、彼は博子に一目ぼれをしたと告白して付き合い、婚約する（映画では中山美穂がイツキと博子の二役を演じている）。

ここで映画の冒頭をもう一度考えてみよう。天国の樹は、雪山に横たわる博子に話しかけて彼女を眠りに誘うが、彼女は途中で目を覚ます。その後、カメラは足早に山を下る彼女を、クレーンショットの高い視点から2分以上のロングテイクで、彼女が視界から消えるまで追いつける。カメラのある位置(中空)には何も存在せず、その直前、目を覚ましたイツキが天を仰いだことから、カメラが天国の樹の目になっていることが分かる（POVショット）。視界から消えるまで彼女を追いつけるカメラは、彼女と別れがたい樹の気持ちを感じさせる。ただし、天国の樹は決して穏やかな性格ではない。博子が母親とともに三回忌の会場から逃げるように立ち去ろうとした時、二人の乗る車が突然激しく揺れる。その激しい揺れは、死んだ樹の抗議や怒りを感じさせる。

この映画では、博子が卒業アルバムに書かれた住

所をメモし、その住所に手紙を出したことから事件が始まる。この行動は彼女の気まぐれによるものだが、彼女が住所をメモしたのは死んだ樹の部屋である。だとすれば、住所をメモし、手紙を出した背景に、天国にいる樹の意志があったと考えることも不可能ではない。イツキとの接点を復活させるために、博子が彼女に手紙を出すよう、何らかの力で働きかけたという推測である。博子との文通がなければ、イツキが中学時代の樹の記憶を呼び起こすことは永遠になっただろう。

その後、博子は秋葉に促されて、遭難した山に向かい「別れの儀式」に及ぶ。彼女が「お元気ですか。私は、私は、元気です。」と泣きながら叫ぶ雪原には風がなく、空は晴れ渡り、遭難現場の山は美しく輝いている。天候に少なからぬ意味を持たせる映画のルールに従えば、天国の樹は博子が離れることを許したと考えられる。彼の興味が永遠の憧れであるイツキに移っていたことが、その理由かもしれない。

5. イツキの「死」

風邪をこじらせたイツキは、病院の待合室で眠ってしまい、夢の中で死んだ父親の臨終場面（正確にはその直前）を目撃する。夢は次のような内容である。

父を乗せたストレッチャーがあわただしく目の前を運ばれていく。ストレッチャーの搬入された手術室の前には母親と祖父がおり、部屋の中に入ると母がイツキを促す。だが扉を開けると、そこにいたのは父親ではなく樹であった。扉を開けた瞬間、時間と場所が切り変わり、彼が家を訪ねて来た場面がよみがえったのである。それは、転校前の樹が、彼女の家で図書館の本を託しに来た時の記憶である。

この「夢」について考える上で重要なのは、父親がこの病院で亡くなっていること、臨終の場に博子がいなかったことの二点である。待合室で眠ってしまった博子は、自分が立ち会えなかった父親の臨終を目撃しつつあったことになる。

だが、「夢」に樹の記憶が割り込んだために、彼女は父親の臨終の瞬間を目撃できずに終わる。父親の臨終が父と彼女の両方にとって重要な瞬間であるとは言ってもない。一方、死んだ樹にとって重要

なのは、彼女に図書館の本を託した瞬間である。これはイツキに対する告白に他ならないからだ。つまり、「夢」の中で、父にとって重要な場面が、樹にとって重要な場面に置き換えられたことになる。

この場面では「藤井樹さん」という彼女を呼ぶ看護婦の声、時空が移動するきっかけになっている。だが、強引で衝動的な樹の性格を考えれば、この背景に彼の意志が働いていたと考えるべきではないだろうか。「藤井樹さん」(これは彼の名でもある)という声を利用して、彼女を自分の時空に呼び寄せたという可能性である。

その後、彼女は母校の中学校を訪れ、二つの事実を知る。一つは亡くなった樹が百枚近い図書カードに名前を書いていたこと、もう一つは樹が亡くなっていたことである。さらに、後輩から、樹が書いていたのは自分の名ではなく、彼女の名前であった可能性を教えられる。

その夜、イツキは高熱を出して倒れるが、吹雪のために救急車は1時間以上遅れて到着するという。祖父がイツキを病院まで担いで行こうとすると、母親が必死に止める。かつて、全く同じシチュエーションでイツキの父が亡くなっていたからである。祖父が病院まで担いで運んだことがアダとなり、手遅れになって夫が死んだと母親は信じているのだ。だが、祖父と口論する中で、担いで運んだことが誤りでなかった事実が分かる。イツキが高熱を出し危篤となったことで、祖父に対する長年の誤解が解けたのである。その後、母親は祖父の気持ちを汲んで引越しを断念する(祖父は引越しに反対していた)。

なんとか病院にたどり着いたイツキは、ベッドで目覚めた後「お元気ですか」と繰り返す。その同じ時、博子は死んだ樹と決別するために遭難した山に向かって「お元気ですか」と叫んでいた。この時、樹と博子が不思議な力でつながりシンクロしたことになる。二人がシンクロしたこと、あるいは病院で目覚めたイツキが「お元気ですか」を口にしたことには、どんな意味を考えるべきだろう。

おそらく、博子とイツキの二人が同時に、死んだ彼を遠ざけていたと考えるのが素直な解釈である。博子の「お元気ですか」は、死んだ樹と決別する意思表示である。だとすれば、イツキにも同じ意味を当てはめるべきだろう。病院のイツキは生死の境をさまようことで、死んだ彼に近づいていた。いや、死んだ彼の性格を考えれば、彼が危篤状態のイツキを呼び寄せようとしていた、と考えるべきではない

だろうか。イツキはその彼に決別の言葉を発していたのである。イツキ自身は、この言葉にそんな意味のあることを知るはずもなく、死んだ樹が自分を招いていることも知らないだろう。何も考えることなく「お元気ですか」と言っていたに違いない。だが、結果的にその言葉が彼を遠ざけ、追い払ったのである。不思議な力で博子とシンクロし、彼女と同じ言葉を口にしたことで、自分の命を守った、と考えることができる。

この節をまとめる。この夜、樹は二度、死の危機を体験している。一つ目は病院までの吹雪の道。もし祖父が倒れたり、足が遅くなったりすれば彼女は手遅れとなっていただろう(祖父は76歳)。この危機を回避させたのは「俺の命に代えても、樹を守る。」という祖父の強い意志である。二つの目の危機は病院に到着した後。この時、樹を守ったのは博子との不思議なシンクロである。

6. 救済される人々

本映画では二つの物語が描かれていることを述べてきた。表に見えるのは、死んだ樹の強い想いが三回忌の後、いつくもの偶然によってイツキに届けられる物語。このロマンティックな物語が本映画の表の物語である。これに対する裏の物語は、イツキと博子を天国に呼び寄せようとする樹の意志が、彼女たちの拒絶の言葉によって阻まれる物語である。不思議でロマンティックな表の物語に、裏の暗く恐ろしい物語が影のように寄り添っている。この影は本映画には独特の重みと奥行きを与える効果を生んでいる。

ただし、本映画の物語はこの二つだけではない。これは物語というよりテーマと言うべきかもしれないが、本映画では登場する全ての人物が救済されるのである。このテーマがあることで、本作品が忘れがたい映画となるのではないだろうか。

6.1. 母と祖父の救済

既に述べたとおり、イツキが父の危篤をなぞるように倒れたことで、母は祖父に対する長年の誤解から解放される。それにより、祖父と母の関係が良好になり引越しが延期されたことも既に述べた。

6.2. 博子と秋葉の救済

映画の冒頭において博子は遭難を回避できただけ

でなく、最後に死んだ樹との決別を果たす。博子の視点で見れば、この映画は生きる彼女が死んだ樹から解放される物語である。樹と決別した彼女が秋葉と結ばれることは明らかで、博子が解放されたことで秋葉も救済されることになる。

6.3. イツキの救済

映画では、父親の死に関する記憶が彼女の危篤を挟んで対照的に再現されている。それまで重苦しく描かれていた父の死が、イツキが病院で目覚めた後は、明るく懐かしく語られていくのである。この変化には、父親の死に対するイツキの心情の変化が反映されていると考えられる。その間にあるのは、樹が死の淵から生還するエピソードだから、この体験が父の死に対する彼女の感覚を変えたことになる。自分が死の入り口に立ったことで、死を恐れなくなった、あるいは死のイメージが変化したと考えるのが常識的だろう。

また、博子との文通によって、彼女はそれまで迷惑な存在でしかなかった樹が自分にとって特別な存在であったことを知る。どこか気になる存在でもあった樹が、自分に強い思いを寄せていた事実は、彼女の記憶を大きく変え、彼とかかわる記憶の全てを明るく懐かしいものに変える力を持つだろう。

6.4. 樹の救済

この物語の中で最も救われるのは死んだ樹である。イツキを忘れられない彼は、彼女に瓜二つの博子と婚約し、三回忌の雪山で彼女を呼びよせようとした。彼の第一の救いは博子を殺さずに済んだこと、第二の救いは「お元気ですか」によってイツキを殺さずに済んだことである。だが、この二つは罪を犯さずに済んだということだから、救済とは別のものかもしれない。

彼の明らかな救済は、後輩の図書委員の女学生たちよってもたらされる。映画の最後、彼女たちが突然イツキの家を訪ねて、「藤井樹」と書かれた図書カードの裏に彼女の見事な肖像画の書かれているこ

とを教えてくれる。そして、彼の肖像画を見た樹の目には涙があふれる。届くはずのなかった想いを、イツキが喜びとともに受け止めてくれたのだ。これは彼にとって何よりの救済である。イツキや博子への執着から解放されるだろう。

7. 補足

本稿では次を仮定した。「死者には意志があり、生きている人間に何等かの影響を及ぼすことができる。」フィクションの世界ではさほど非常識な前提ではないが、最後に、この前提を差し引いた解釈を考えておきたい。この前提を取り去った場合に消去されるのは次の推論である。

- ・彼が博子を殺そうとした可能性
- ・彼がイツキを殺そうとした可能性
- ・博子が手紙を出したことに彼の意志が影響していた可能性
- ・イツキの夢の妨害（父の臨終を見られなかったこと）を行った可能性

これらの推論を消去しても、本稿の論理は全て成立するから、この仮定を否定しても構わない。だが、死んだ樹に意志があり、強く惹かれたイツキと彼女に瓜二つの博子を呼び寄せようとしていたと考える方が、物語としてはるかに厚みが出るだろう。

本映画は岩井俊二監督の長編第一作である。岩井氏の作品は繊細かつ感覚的な印象を強く与えるが、その奥には緻密な因果関係と密度の高い意味が隠されている。そして、表層的な鑑賞者と深層を読む鑑賞者の両方を満足させるように工夫されて作られている。本映画にはそんな彼の映画作りの特徴が鮮やかに表れた長編処女作である。

参考文献

柳澤浩哉「映画の文法から映画を読み解くー『花とアリス』を事例に一」（桑原隆編『新しい時代のリテラシー教育』、東洋館出版、2008年）